

その日、城ヶ崎美嘉は上機嫌であった。

特にこれといった理由があるわけではないけれど、他人に聞こえるくらいの鼻歌を口ずさんでしまっような、一種の爽快感が美嘉の心に芽吹いていた。

昨日の仕事が上手くいった次の日や、妹の莉嘉となんでもない話で盛り上がった次の日、友達と遊んで少し帰りが遅くなった次の日など、ほんのちよつとした喜びが、一日、また一日と連鎖して続いていく感覚。

そんな日々を積み重ねていける自分は本当に幸せなんだなあ、と他人事のように微笑んで、美嘉は所属する事務所の扉を開けた。

「おはようございまー」

「おそーい！」

突然の叱責。

しかも聞きなじみのある高音。

「……」

美嘉は状況を確認する。

整理整頓された事務所の奥に長机がセットされており、さながら面接会場のようである。長机に陣取っているのは見覚えのありすぎる四人、左から志希、フレデリカ、周子、右端の奏に行き着いた時点で美嘉は露骨に面倒くさそうな顔をする。

「そんな目をして、助け舟は出せないわよ」

「ええ〜……」

「なんだねなんだね、そんな苦虫という苦虫をミキサーにかけた苦虫ジュースの中に残ってる混ぜ切らなかつた苦虫を嘔み潰したような顔して〜」

「形容詞が長いし……」

フレデリカはサングラスを掛けており、周子はセーターを肩に掛けている。志希は既に寝ていた。

「えーと……カメラはどこかなー……?」

「ノー! デイス・イズ・オーディション、アンド・モアー!」

「ええ……フレちゃんがいつになくテンション高いんだけど……」
「奏を見ても彼女は首を振るばかりである。つれない。」

「まあ、冗談はこれくらいにして〜」

「冗談の自覚はあったんだ……」

「それでは、みゅーじっく・すたーと〜!」

フレデリカが小気味よく指を鳴らすと、事務所照明が一段階暗くなり、どこからともなくどこかで聞いたことのあるBGMが流れてきた。

「……これ、どこかで聞いたことある気がする曲なんだけど」

「何か問題ある？」

「いや、絶対カメラ入ってるでしょこれ」

「ノー！ ノー・カメラ！ プリーズ・空気読んでミカちゃん！」

「あーもう机に足掛けたら危ないじゃん」

「おっと失礼」

これにはフレデリカも反省である。

ほっ、と美嘉が胸を撫で下ろし、ようやく落ち着きを取り戻したところで、

「レイイイイス・エンド・ジエントルメエエエン！」

唐突に、開会宣言が響き渡る。

声の主は、いつの間にか覚醒していた志希であった。何故かサングラスを掛けている。お揃いらしい。

「お集まりの皆様、大変長らくお待たせ致しました！ 只今より！ 第一回！ L i P P S 次期追加メンバー選抜オーディションを開催致します！」

「おー」

やる気があるのかないのか、力なく拍手をする初代L i P P Sの面々と、またもやどこからともなく聞こえてくる拍手のS E、美嘉が改めて周囲を見渡すと、明らかにA Dであろう人物が配置されているのが確認された。

目が合うと、申し訳なさそうにウツスと会釈されたので、とりあえず美嘉も小さく会釈を返した。

「えー、それでは面接始めます。席に着いてくださいーい」

相変わらず飄々とした調子で、周子が状況を整え始める。

「えっちよつと待ってアタシも準備するから」

慌てて長机の方に駆け寄り寄る美嘉を、周子は穏やかに制する。彼女がそつと指差した方を見ると、そこにはあからさまに座り心地の悪そうなパイプ椅子が用意されていた。

仕事のできるADである。

「いやー、申し訳ないんだけど、美嘉ちゃんは面接される方なんだよね」

「えっ」

寝耳に水もいいところである。

それをいうなら、事務所のドアを開けた時からずっと寝耳に水がびちゃびちゃ掛かっている状態なのであるが。湿度が高い。

「かわいそうに、ミカちゃんはこないだのレッスンで筋が張っている等の発言をしたことにより、ウサミンゲージが満タンになってしまい……」

ちーん、とばかりにフレリカが手を合わせる。

「そんなわけで、ミカちゃんは一時的にLiPPSから脱落してしまったのです……」

「お待ちせ、奏ちゃん」

「レナさん？」

放課後、事務所ではなく新宿駅へ向かうよう指示された私を迎えたのは、プロデューサーさんではなく、先輩アイドルの兵藤レナさんだった。

「もしかして、レナさんが講師役ですか？」

今日は演技に関する特訓を外部で行うことになっている。そのうえで時間になって彼女が現れたというシチュエーションから、予想は間違いないと思う。けど、念のために聞いてみるとレナさんは微笑みで問いに答えてきた。

「ご名答。プロデューサーさんから聞いたわ。今、L i P P S主演のドラマの撮影中なんだった？」

「ええ。でも監督さんに難しい顔されちゃって。それで次の撮影までに何か掴めないかと、プロデューサーさんと相談していたの」

「聞いたとおりで合ってる様ね。オーケイ、短い時間だけでもよろしくね。さ、行きましょう。ついてきて」

彼女はスケジュールに間違いが無いことを確認すると、身を翻して先導するように歩き出した。

夕方の新宿は、夜のソレよりは歩きやすいものの、老若男女国籍問わず数多の人で溢れてい

る。これだけの人目があれば、いくらメイクを抑えた制服姿とはいえ、見る人が見れば、私がアイドル速水奏であることに気づく人もいるだろう。

特にこの先は日本最大の歓楽街。そこそこ名が通ってきているアイドルが、社会人男性と繁華街を歩くのはいろいろと問題だろう。かといって、女子高校生が一人で歩くのもまたトラブルに遭いかねない。とすれば、成人女性であるレナさんが迎えにくるのは、確かに適任だとも思える。

とはいえ。

「それで、これから何処へ連れて行かれるのかしら？」

レナさんを疑うわけじゃないけど、歌舞伎町を奥へ奥へと進むのは、流石に幾ばくの緊張があるのも事実。けれどこの問い掛けは、さっきと同じ微笑みで今度は黙殺された。

内緒というのなら、しかたがない。悪いようにはされないはずと気持ちを切り替え、レナさんを見失わない程度に周りに目を向けてみた。

新宿自体はよく来るけど、ここまで来る用事は無かったから、実際に歩くのは初めてだったりする。新宿歌舞伎町と言えば、様々なジャンルの作品に登場する夜の街、といったイメージが強烈で、事実夜のお店の看板がそこかしこで存在をアピールしている。けれど、そうではない普通のカフェやショップなどのお店も、同じかそれ以上に居を構えていて、女性同士や子供連れで賑わっているのが意外だった。

「もつとアングラな場所だと思つてた？」

そんな私の挙動に気づいてか、レナさんが振り返つて尋ねてきた。

「そうね。映画では殆どが不夜城として使われるから、少し拍子抜けつてところはああるわ」

「それはそれで間違つてはいないわ。でもそれは一面であつて、本当はそれだけじゃない。実際に体験しないとわからないというハナシの典型みたいな街よね」

「ええ。イメージが先行しすぎると、ずっと後まで引き摺つてしまつて、なかなか修正が難しくなるのよね」

「だから、いろいろな体験を積み重ねて視野を広くすることが大事、とよく言われるわね。実際私も、奏ちゃんはこの言う場所に慣れているものだとばかり思つていたしね」

「私、学校じゃ優等生なのよ、これでも」

「同年代の子達と比較しても大人びて見えるからねえ。よく言われているとは思うけど」

「もう慣れつこになつたけれどね。それで、歌舞伎町デビューの経験を積ませることがレッスン、じゃ無いですよね流石に」

「ええ。ここはただの通り道よ。目的は、あそこのビルの三階」

そうレナさんが指し示したのは、複数の飲食店の看板が張り出されている、何の変哲も無い雑居ビル。高校生が入つていくにはなかなか難易度が高いのだけれども、慣れた様子で階段を上つていくレナさんに手招きされたので、私も意を決して足を踏み入れる。

案内された先は、まだ時間が早いのか静まりかえったフロアの一番奥。飾り気の無い一枚扉にかかるプレートに書かれている英文字はおそらく店名だろう。

「ここつて、バー……かしら？」

あからさまな店名の他のテナントとは少々違う毛色から、そう推測してみる。まあバーとかスナックとかの違いなんてわからないんだけど。

「流石の洞察力ね。バーで正解よ。細分するなら、カジノバーってところかな」

レナさんは小首を傾げた私に返答しつつ、鍵を開け中へ入り、照明を点けた。光を取り戻した室内に浮かび上がったのは、シックなカウンターと数客のスツール、二組のハイタイプのテーブルセット。そして、レナさんの言う細分化をまさしく表現する緑色のテーブルが、部屋の奥に設置されていた。

「とりあえず、適当に座つてて」

勝手知つたる様子で店内の設備を弄っていく彼女に言われるまま、カウンターのスツールに腰を掛けた。

「もしかして、レナさんのお店？」

「残念ながら不正解。ここは昔の同僚が開いたお店で、たまに手伝ってあげたりしてたのよ」

「へえ、だから合鍵を持つてるのね。でも、この時間だとお店に迷惑にならないかしら」

この店の営業時間はわからないけれど、一般的な会社員のアフターを目安に店を開くのが普

メメントモリ。その言葉を教えられたのは、まだあたしが特別だってわかる前だった。どこにでもいる子どもと同じで落ち着きがなくて、いつもどこかで走り回っているような、そんな年頃だった。そんなあたしがパパに手を引かれて行った近所の美術館に、その絵はあった。

お金持ちと骸骨が仲良くダンスをしている絵。その色遣いは煌びやかなものだったけれど、それでいてどこか暗い印象を植え付けてくるような絵だった。でも、あたしはその絵を嫌いだと思わなかった。

少なくともその日の美術館の中で印象に残っているのはその絵だけで、そう考えれば、きつと一番気に入った絵なのかもしれない。暗い色調はあたしの心を落ち着かせるには十分で、その時のあたしは走ることもせずに、絵をまじまじと見ていた。パパが腰を落としたのもあたしの行動があまりに普段とかけ離れたものだから、きつと感銘を受けたに違いないと思ったのだろう。

——メメントモリ。死を意識せよっていう意味なんだ。

そう言った後にパパは、志希にはまだ分らないと思うけれどね、なんて付け足してあたしの目線で絵を眺めた。確かにその通りで、その時のあたしには一体どういう意味かは分からなかった。でも、隣にいるパパの息遣いを聞いている内に、その疑問はどこかへ消え去っていて、あたしたちは何も言わずに、ただ二人でその絵をじっと見つめていた。

瞼を開くよりも先に、しとしとと降る雨の音が聞こえていた。

志希はしきりに目を瞬かせてからゆつたりと目を開いていく。ぼやけていた輪郭が次第に明確になっていくにつれて、昨晩ベッドに潜り込んだことを思い出す。雨ながらに努力しているようで、カーテンの隙間から漏れ出した光が朝だと伝えていた。だが、そんな苦労も志希には関係ないようで、志希は瞼をもう一度閉じた。

「眠いから……パスでー」

枕元に置いてある小瓶を取り出して蓋を開けた。自分がリラックスできるように一から全て自分用に調合した特別な物だ。極力深い眠りに落ちるための代物で、志希がそれを枕元に振りかけようとした時、ノックもなしに部屋の扉が開けられた。

「起きてるわよね」

「起きてないよ……ネムネム……」

志希はごろんと扉に目を向ける。そこにいるのはユニット仲間である速水奏だった。自分が呼んだわけではなく、プロデューサーが呼んだのだろうとそこまで考えて、志希は小瓶の蓋を閉めると布団を頭から被った。

「起きてるじゃないの。ほら、志希。起きなさい」

奏は志希のもとへと行き、志希の布団を剥がそうとする。志希も負けじと布団の端をぎゅつと掴んで丸まろうとするが、奏に指を剥がされて未遂に終わった。

「イヤン♪」

布団が剥がされ、志希のあられもない姿が晒される。と言つてもいつも通りの普段着であり、そもそも志希はそういった格好に大して恥じらいを覚えるような性格でもない。そのことが分かっている奏も奏で、ため息をつく。

「いやんじゃないの。あなた、お仕事あるでしょ。プロデューサーも待つてるわよ」

「ほんとに？」

志希は辛うじて体にかかっていた布団を足蹴にすると、ベッドの縁に立っていた奏の腕を引っ張り、服に鼻を押し付けて匂いを嗅ぐ。奏の匂いに交じって、プロデューサーの匂いが感じられたのか、ぐりぐりと顔をこすりつける。慣れたもので、奏はそんな志希を呆れ顔で見ながら、辺りを見回した。

辺りに散乱する試験管やピーカー、白衣などは彼女の私物だ。テーブルはある程度綺麗にしてあったが、机の下には書類が束になって置かれている。アイドルという側面よりも、むしろ科学者としての側面が突出している部屋だ。それも、奏を呆れ顔にさせてしまう一つの要因だった。

「今日はパンを食べてきたんだね。良いにおーい」

「残念だけど、貴方は悠長に食べてる時間ないわよ。雨も強くなるみたいだし、急いで行きましょ」

奏から顔を離すと、志希は手を上げた。

その意味が分からずに奏が固まっていると、志希が小さく、んつと言った。そこでようやく合点がいき、奏は落ちていた服を手を取って志希の顔に服をかけた。

「あのね、私はお母さんじゃないのよ。というか、私より年上でしょ」

「ばれたかーちえー」

もともと服を脱ぎ捨てて、奏に渡された服を着ようと腕を袖に通す。そこで少し固まった後、志希はにやりと笑う。

「奏ちゃん、イヤン♪」

「……その流れ毎回やる気？」

「んもう、つれないなー」

「大人しく着替えてなさい」

「はあーい」

奏は志希の後ろに周り、寝癖だらけの髪の毛を梳かしていく。寝癖と湿気でいつもよりボリュームの出た髪を梳かすのは中々に骨が折れる。それでも、奏は丁寧に志希の髪を梳かす。しゅいしゅいと櫛を通す姿に乱れはなく、傍から見ても、姉妹のようだ。

そんな大層なものでもないが、除幕式であった。しばし、無言でそれを見つめる。

ちらちらと集まる視線を感じて、彼女はようやく、部下たちが自分のコメントを待っているのだと気づいた。除幕式と検索をかけ、彼女は記憶にあるニュース映像などから適切な言葉を見つけようとする。

映像の中の中年男たちは（実際にどう思っているかはともかく）全員満面の笑顔を浮かべていたように思う。めでたい席だからであろう。しかし自分にそれが求められているだろうか。彼女自身は別段と何事にも動じない鉄の女を気取っているつもりはないのだが、周囲からはなぜかそのように思われることが多いらしい。このことについて彼女が旧知の間柄である今西部長に相談してみたところ、笑われただけで終わった。はなはだ不本意であった。

いや、笑顔などはこの際どうでもいいのだ、と彼女は思い直す。少なくとも何かは言わねばなるまい。しかし何を言えればいいのだろうか。考えてみれば、自分にコメントを求められることはすぐに思い至りそうなものであったが、今の今まで全くの慮外であったのは、あるいは無意識的に考えることを脳が拒否していたからかもしれない。あったのは、あるいは無

「うん、まあ……なんだね……中々いい仕事じゃないかね」

助け舟のつもりか、傍らの今西が苦笑交じりで言う。好々爺といった体の今西であるが、この魑魅魍魎うごめく芸能界を数十年にわたって生き抜いてきただけあり、その観察眼やアドバースは常に的確であった。その今西がそう言うのだから、これはいい仕事なのだろう。とりあ

えずそれだけは納得することにした。

「君はどう思う」

振り向き、部下の一人に尋ねてみる。まさか自分に振られるとは思っていなかったのか、彼はわずかに目を見開くと、歴史ある346プロダクションの本社ビルエントランスの一隅に据えられたそれを見上げて——そう、一九〇センチ近い長身の彼よりもなお、それは上背があるのだ——首筋に手を当て、言葉を探すように視線を左右させた。

「その、自分は……こういったことにはその、不勉強で、理解できているとは言いがたいのですが」

どういった勉強をすればこれを理解できるのだろうか。部下は軽く咳払いをすると、こう告げた。

「いい、笑顔です」

それ絶対適当に言っただろうと彼女は思ったが、言葉には出さなかった。

「そうだな」

確かにいい笑顔ではあった。そしてこれが社会に沢山の笑顔を生んでいるというのも、また事実であった。それについて、社の内部からも外部からも、「なんで？」と彼女に問い合わせが来る。私が聞きたい、と正直に答えるわけにはいかない彼女であったが、原作者に聞いてもおそらく私が聞きたいと返ってくることだろう。

原作者の顔が脳裏をよぎり、彼女は軽く息をついた。かつてはアレを御せると思っていたこともあった。「黙っていけば美少女」とはアレ自身の言でもあったが、アレを黙らせることなど誰にもできそうにない。そして大事なことに、黙っていない今のほうが人気であった。

「少し自信をなくしてしまおうな」

「え？」

自嘲めいたつぶやきが聞こえていたのか、部下の男が訝しげに眉を寄せる。彼女は、いや、と軽く手で制し、彼女は周囲を見渡して言った。

「何が流るるか分からない世の中だ。諸君らも常にアンテナは高く張っておくように」
部下らの困惑含みの返事を聞きながら、うえきちゃんは黙って微笑み続けていた。



「やだ。怒られる。私絶対行かない」

「プロデューサー、子供じゃないんだから……」

「いやーだー」

椅子に座りつつ左右にうねうねと揺れるプロデューサーさんを見て、あたしは昔流行った健康器具を思い出した。ほら、あれ、正式名称知らないけど、黒くて細長い棒みたいなやつで、

片手で持つてびよんびよんさせるやつ。分かるかな。実家にあつたんよ。プロデューサーさん
つて細身だし、全体的に色も黒っぽいし。言わんけどね。

「フレデリカがいないんだから、せめてプロデューサーが行かなきゃ駄目じゃん」
「専務怖い……」

「あーもう莉嘉よりめんどくさい！」

プロデューサーさんが頭を抱えて縮こまり、美嘉ちゃんは頭を抱えて天を仰いだ。その対比
が妙に面白くて笑おうとしたら、横の奏ちゃんがふふつ、と肩を揺らしていた。先を越されち
やったね。

「ただいま、プロデューサー。除幕式ならもう終わったわよ」

「ほんとに!? やったああああっ！ 私大勝利！ あ、あとおかえり！」

「むしろ負けてるでしょ……」

全身で喜びを表現するプロデューサーさんに、美嘉ちゃんはゲンナリした様子で肩を落として
た。いやはや、どっちが保護者なんだかねー。

いやね？ プロデューサーさんも、普段からこんなじゃないよ。いつもはもう少しはち
やんと大人してるんだよ。でもプロデューサーさんってば専務を大の苦手として、専務が関
わることになるどころやって駄々をこねるんだよね。だけど、その原因の三分の一くらいはき
つとあたしにあるんで、あたしとしては美嘉ちゃんみたいにプロデューサーさんを叱る気にな

『人生で一番幸せだと思ったのはいつですか？』

以前、雑誌か何かで見かけた質問を、その場にいたプロデューサーに聞いてみたことがある。心理テストだったり性格診断だったり、何かしら、どこかしらで時折見かけるような質問。

聞いてみたのも特に意図があった訳ではなくて、待ち時間の間の軽い暇つぶし。

そんなこっちの考えはプロデューサーも解っていたようで、どうして、とも聞かずに「うーん」と昔を思い出すように視線を遠くに投げていた。

他愛もない、意味もない、こんなことでも真面目に付き合ってくれるのは、プロデューサーのいいところだと思う。生真面目というか、お人好しというか。そこに甘えてついついからかったりしてしまうのは、まあスキシップということ。

「強いて言うなら、今かな」

思案をめぐらす横顔を眺めていたらいきなり目が合ってしまったって、咄嗟に顔を背けてしまった。

「理由……聞いてもいい？」

頬が熱くなるのを感じながら、取り繕うように横目でプロデューサーを見る。こちらのことなど知らぬ存ぜぬとでもいうような普段通りの顔に、これはさっきのも無頓着なだけだったのでは、と疑念が湧いてきた。

「歳をとってくると、どうしても昔のことが美化されてくるもんだけど、おかげさまでやり甲

妻のある仕事に就けたからな。次はどんなことをしよう。何を仕掛けよう。ライブ、イベント、宣伝、タイアップ。毎日考えることは山ほどあるし、幸いなことにどれも楽しい。打てば響くというか、育て甲斐があるというか、そんな美嘉たちみたいなアイドルがいてくれるおかげだよ」

子供のように目を輝かせて言うプロデューサーに、なにそれ、という言葉がのど元まで出かかって、でも声になることはなかった。

「ま、この城ヶ崎美嘉と一緒にいるんだから、今が一番だなんて当然だし？　むしろ違うとか言ったら許さないから★」

気取らない程度にポーズを決めて、プロデューサーに向き直る。ブレなく、隙なく、上がつた体温も落ち着いて、いつもの調子を取り戻す。

「そういう美嘉はどうなんだ？」

「アタシ？　そうだねー……」

自分も今だと即答してもよかつたけど、せっかくだからとさっきのプロデューサーと同じように「うーん」と遠くを眺めてみた。

十七年。物心がついた頃からだと十四、五年くらいかな？

プロデューサーや、もっと年上の大人から見ればたかだか十数年かもしれないけれど、アタシにとっては文字通り自分の全てでもある十数年。どこを切り取っても楽しくはあつたけど、

それでもやっぱり一際輝いて、煌めいているのはアイドルになってからの思い出が圧倒的に多い。

初めて事務所を訪ねてから今日この時まで、全部が鮮明に思い出せるのは、まだそんなに時間が経っていないから、というだけではないと思う。

改めて納得したところで答えようとして、でもその前に横目でプロデューサーを見る。こちらに向けられた視線はいつも通りで変わらず、それが少しだけ悔しかったから、わざと焦らすように上目遣いでプロデューサーの方に向き直った。

「アタシも今……かな」

声にもたつぷりと感情を乗せて、もう一突き。

自分でも中々の役者ぶりだと思ったその一撃はどうやら見事に効いたようで、困ったように眉尻を下げたプロデューサーの顔がほんのりと赤くなっていた。

「ジョーダン、冗談だって。プロデューサーって、そういうところ可愛いよね」

「……そういうキャラで売ってる面もあるから、誰にでもするなどは言わないけど。程々な」

「——はい」

プロデューサーにしかしなないから大丈夫だよ、なんてサラっと言えば格好も付くのかもだけど、考えただけで照れが出てしまいそうでダメだった。

「奏ちゃんなら簡単に言うんだらうなー」

「何か言ったか？」

「ぼんやりと呟いた独り言に聞き返してきたプロデューサーに、なんでもないと言った首を振る。

「あ、でも今が一番だっていうのは、ホントだから。そこは信じていーよ★」



「お疲れ様でしたー」

誰かが言ったその一言を切っ掛けに、スタジオ内の空気がふっとその重さを消したように感じた。

同じように繰り返される挨拶と雑談に、世界が急速に色を取り戻していく。

LiPPSとしての新曲。今日はそのジャケットや宣材で使うための撮影だったのだけど、時計を見るとおおよそ予定通りに終わったというところだろうか。

何事もなく終わったことに、内心ホっとする。

五人同時の撮影となれば、自分だけが気負いすぎてもダメだし、逆も同じ。

歌と同じように五人の息を揃えないと、最高の一枚なんてものは撮れない。

とはいえ、その点で言えばこのLiPPSというユニットは、まあ自画自賛というか、身内